

在外教育施設における行事の特色と実践

前蘇州日本人学校 教諭

埼玉県さいたま市立本太小学校 教諭 養田 光貴

キーワード 在外教育施設、中国蘇州、学校行事、国際理解・現地理解教育

赴任校の概要：(2024年8月26日現在)

学校名・日本語：蘇州日本人学校

学校名・現地表記：Japanese School of Suzhou

URL：<http://www.jsscn.org/>

1 はじめに

令和3年度に中国の蘇州日本人学校に派遣され、在外教育施設で教鞭をとる貴重な機会をいただいた。コロナ禍での派遣であったため、オンライン授業や隔離などを経験したが、令和5年度からは通常のエデュケーション活動を実施することができた。中国蘇州での教育活動は日本とは異なることが多々あり、私にとってかけがえのない体験となった。ここにその概略を報告する。

2 むしゃく 無錫日本人補習授業校での授業支援

(1) 無錫日本人補習授業校の子どもたち

補習授業校とは、現地校やインターナショナルスクールに通学する児童生徒が、再び日本国内の学校に編入した際スムーズに適應できるよう、基幹教科の基礎的知識・技能及び日本の文化を日本語によって学習する教育施設のことである。日本の教科書を使用し、生活習慣とともに学習・体験しながら土曜日の午前中に授業を行う。約10名の無錫企業駐在員や帯同家族のボランティアで教えている。

(2) 体育授業の支援

年に2回、文部科学省派遣者は補習授業校に出向き授業支援を行う。私は3年間で小1～中2までの全校体育、5年生の国語の授業を担当した。補習授業校は週に1日4時間授業のため体を動かす時間がほとんどないという課題がある。そのような中、「命令ゲーム」「レンジでチン(凍り鬼)」「手つなぎ鬼」「大縄」など、集団で楽しむことのできる運動に取り組んだ。5年生の国語では、日本の文化である古典作品を楽しみながら音読したり、時代背景や作品に込められた思いに着目できるように工夫した。



補習授業校体育支援の様子

3 蘇州日本人学校の運動会

3年目には保健体育部長を務めた。新型コロナウイルスの規制がなくなり、保護者や地域の方、無錫補習授業校の児童生徒が参加し、半日開催であったが充実した運動会を実施することができた。蘇州日本人学校の伝統

を受け継ぎながら、以下のような改善をした。まず、中学部だけでなく小学部6年生から応援団長を選出するように提案した。小学部から応援団長を選出することでより下級生からの目標（なりたい姿）が身近に感じられるようにした。小学部と中学部が応援のことでより深く話し合う姿が見られ、小中連携にもつながった。次に、表現の要素を団体種目に取り入れるように提案した。蘇州日本人学校の運動会には表現種目が入っていない。そこで、年間指導計画を見直し、各学年の表現運動（遊び）を運動会前の体育の授業で実施した。単元のゴールを運動会にもってくるようにデザインすることで、教職員の負担感なく実施することができた。

4 蘇州日本人学校の修学旅行

(1) 北京から学ぶ中国の歴史

3年目は6年生を担当した。蘇州日本人学校の修学旅行は2泊3日で北京へ行った。新幹線で片道5時間の長旅であった。「天安門」や「万里の長城」など、歴史的建造物をはじめ、民家訪問を行い、北京で長年住んでいる民家の方へ話を聞くことができた。北京の民家はほとんどが平屋となっている。建物ごとに住居スペースが分けられているのが特徴的で、平屋がいくつも敷地内にあった。子どもたちは、中国という国の歴史や文化に触れ、スケールの大きさに圧倒されているようだった。日本の歴史は、中国からたくさんの影響を受けている。昔の中国の進んだ文化や歴史を間近に感じ、日本と中国の歴史を比較することで日本と中国のつながりについて深く考えていた。

(2) 日本と中国をつなぐ子どもたち

北京大使館訪問では、外交官の仕事や大使館の役割などについて教えていただいた。大使からは「縁」の大切さについてお話をいただき、全国各地から集まっている子どもたちにとって、自分を見つめ直すよい時間となった。また、日本の友達に中国のことを伝えることも外交官の立派な仕事というお話を聞き、子どもたちに日本と中国をつなぐ「小さな外交官」としての使命が芽生えているようだった。



北京大使館大使のお話

5 蘇州日本人学校の学習発表会

蘇州日本人学校の特色の一つに学習発表会がある。学習してきた成果を学年ごとに発表し合い、異学部、異学年のふれ合いを深めたり集団の中での役割や表現力を高めたりすることを目的としている。児童生徒が活躍する機会でもあり、保護者の方はとても楽しみにしている行事の一つである。

2年目には2年生を担当した。国際結婚家庭の児童が非常に多く、日本語力に課題が見られるため日頃の音読指導を特に大切にしている。俳句や詩など教科書の内容だけに限定せず、様々な内容に慣れ親しめるようにした。学習発表会では、一人ひとりが活躍できるように音読劇を実施した。ダンスを取り入れたり、歌を歌ったり、国語の要素だけでなく、体育や音楽などの要素も取り入れた。主体的に活動に参加してほしいという思いで、ダンスを子どもたちが協力して考えたり、音読の読み方に手振りや身振りの工夫を取り入れたりするなど、子どもたちに考えさせる場面を多く設定した。本番を終えた子どもたちの達成感に溢れる笑顔がとても印象に残った。

6 おわりに

3年間という月日はあっという間であった。中国という地で生活したからこそ感じたこと、考えたことがたくさんあり、人として成長することができた。批判的に物事を捉えたり考えたりすることは大切だが、「日本ではこう」「中国ではこうだから」などと、相手の価値観や教育観を否定して終わるのではなく、相手を敬い、多様性を尊重してこそ自分の価値観や教育観が広がっていくと考える。「世界と向き合い 未来の創り手として輝き続ける」グローバルな人材を育成するために、中国蘇州で経験したことを日本の子どもたちに還元していきたい。